

講演録

「電子メールとWWWを利用した英語教育」

学習院女子中高等科 八名 まり子 氏

【司会】 それでは、まず八名先生にお願いいたします。

(講演)

八名でございます。本日は皆様大変お忙しい中、多数お集まりいただきましてありがとうございます。

また、このような機会をお与えいただきまして、計算機センター所長の轡田先生始め、センターのスタッフの先生方に御礼申し上げます。センターの先生方のサポートのお陰で、今日まで参りましたことを感謝致しております。

また短大の計算機室の岩城先生には、どうしたら女子部でインターネットが使えるようになるかというようなことなどを含めてアドバイスいただきました。

また、これから発表なさいます男子部の町田先生からは計算機センターにお世話になる以前からアメリカの高校とどうやってインターネットに接続するかをお教えいただきました。男子部は海外との交流やインターネットの利用に関しても進んでおり、ホームページも大変すばらしいものです。女子部のホームページに関しましては、学習院女子高等科の卒業生で、現在大学院生として計算機センターのインストラクターをしております松本喜以子さんが大変力になってくださいました。彼女なしではこのホームページはでき上がらなかったと思っております。

そのように皆様の大変な手助けをいただきまして、私は本当に英語の教員として余りコンピューターができるわけではございませんでしたが、ただ海外の生徒たちと自分の生徒たちが交流をして、何か学んでほしい、英語を勉強するのは楽しいなということに気付いて欲しいと思いついてこままでまいりました。後でディスカッションの機会にいろいろとお聞きになると、私は技術的なことはよくわかりませんので、ご出席の先生方、インストラクターの方に助けていただかなければならないと思います。そのような私でも、生徒たちが非常にわくわくとして授業をインターネットでできるということをお話しさせていただければと思います。

お配りしたハンドアウトには、英語のリーディングプロジェクト (Reading Project) の概要をごらんいただけたと思います。本日は1時間ほどお話しする事になっておりますので、まず、どうやってインターネットのプロジェクトを始めたかということ、そして合同リーディングクラスを中心にお話ししたいと思います。交流の相手校はウエストンスクールとトラファルガースク

電子メールとWWWを利用した英語教育

学習院女子中高等科 八名 まり子

mariko.yana@gakushuin.ac.jp

学習院女子高等科では1992年から電子メールを英語の授業に取り入れて、海外の高校と交流を行ってきました。94年春までは女子部英語科の机上にあるMac Classic II 1台を電話で計算機センターにつないで生徒や私がメールを打ち込んでいましたが94年度からは計算機センターで生徒全員がアドレスを得て、生徒それぞれがコンピュータを操作して授業を行っています。94年度は電子メールだけの授業でしたが95年からはホームページにも着手しました。

Reading Project

●参加学年 高等科3年英語演習履修生徒約20名 週2時間(5、6限)

- 目的
1. readingの技能を高めると同時に交流によって英語による自己表現力を高める。
 2. computerを利用することで英語が強力なcommunicationの道具であることを理解させる。
 3. 交流を通じて自国の文化と異文化を理解する。

1992年1月～2月

"Young Goodman Brown" by N.Hawthorne
With Lakeside School (Seattle, WA)

1994年9月～1995年3月

The Nine Days Queen by K. Bradford
With Weston School (Montreal, Canada)

1995年9月～1996年2月

Kitchen by Banana Yoshimoto
With Trafalgar School (Montreal, Canada)

●成果

- 授業に対する積極性が増した。
- 寸暇を惜しんで本を楽しんで読み始めた生徒がいる。
- 自国の文化について考えるようになった。
- Kitchenは女性の地位などについての話題で母親とのコミュニケーションを増やしたようだ。(生徒の母親も間接的に参加した)
- 英語は楽しいと思い始めた生徒が多い。
- computerは面白いと思い始め、大学でももっと学びたいと考えるようになった。

●生徒の反応

- 自分の英語が相手に通じ、また相手からの英語のメールが読め自身がついた。
- Readingのスピードが増した。
- 辞書を引かずに意味を推測していく力がついた。
- 今までの外国とのペンパルは遠い存在だったがメールの相手はcomputerの中心に非常に身近な存在であると感じた。
- 少しずつではあるが英語で考えて意見を書けるようになった。
- カナダという国の文化を身近に感じた。
- Internetの世界の広さに驚いた。
- 英語の道具としての大切さを感じた。

第8回学習院大学計算機センター特別研究・研究会 於学習院大学(1996年3月6日)

Internet at Gakushuin Girls' High School

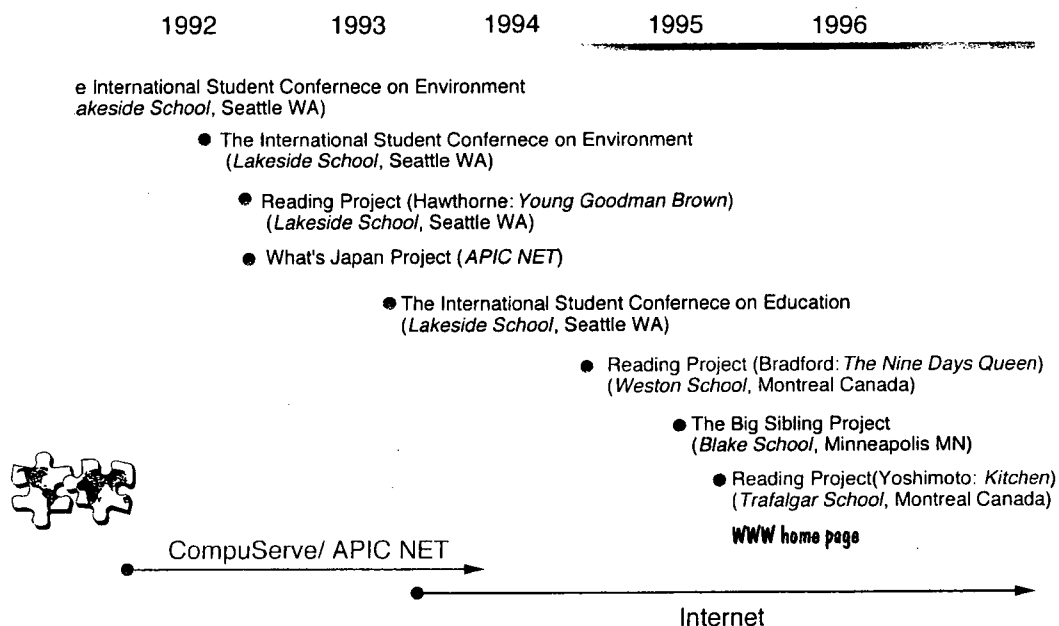


図 2

ールで両方ともカナダのモントリオールにある私立の学校です。

皆様方のハンドアウトの2ページ目に入っておりますこれが同じものでございますが、学習院女子高等科のインターネット利用経過をご覧いただきたいと思ひます。

1991年から96年までの間に「CompuServe/APIC NET」と入っていますが、インターネットになったのが大体1993年あたりで、CompuServeを利用しました。

まず最初に、「The International Student Conference on Environment」で、アメリカ、シアトルのLakeside School と交流が始まりました。実はこの学校につきましては2月8日にビル・ゲイツのテレビの特別番組がありまして、レイクサイド校が紹介されましたのでもうご存じの方もあられるかもしれません。マイクロソフトの会長のビル・ゲイツが卒業した学校でございまして、この学校と男子部の方が、いつか環太平洋の学校を結んでパソコン会議を開くを考えていることを科長から漏れ聞きまして、それで、ぜひ女子部の生徒も参加できないだろうか、そしてレイクサイドと女子部も何かパソコン通信で話ができないだろうかと思っております。そこで町田先生にお教え戴きニフティサーブから入ってコンピュサーブに接続すれば、後はインターネットでレイクサイドにつながるんだというようなことで、とにかく私は何もわかりませんでした、それをするにはコンピューターが1台、それプラス、モデムというものがあればいいということ

を町田先生から教えていただきまして、そして何もわからないまま、無我夢中でこのレイクサイド校とつなげるということに専念しました。1991年2月頃当時の科長に話したり下中財団の奨励金に応募し助成金を戴きまして、5月の連休にはテストメッセージをレイクサイドと交換することができまして、大変感激したことを覚えております。

レイクサイド校とはパソコンで環境会議を開くのではなく、実際に男子部の代表生徒2人と女子部の生徒代表2人がレイクサイドへ参りまして会議は3年続きました。3年目は環境会議にはなりません、環境会議を2年続け、3年目は教育に関する会議をいたしました。パソコン通信では環境会議のテーマや開催方法について協議したり、終了後は会議についてフィードバックをし次年度に生かすことを、レイクサイドの先生や生徒と話し合いました。これはコンピュサーブを使っておりましたがコンピュサーブというのは、お使いの方はもうご存じだと思いますが、秒単位で料金がかかりそれが問題でした。というのは生徒は使い方を覚えると自分でやりたくなくてまいりまして、自分で送信しますと、そのあと切断をするのを忘れてそのままにしておいたりすることがあり、メールは即時に送れて短時間しか使用していない筈なのに後で高い請求書が来たりしまして、生徒には「メールを送信するのは私にやらせてね」と申しておりました。コンピュサーブの請求書が毎月気になりながらも、コンピュサーブを使っておりました。

1回目のreading project はシアトルのレイクサイド校とホーソン(Hawthorne)の「ヤンググッドマン ブラウン」(Young Goodman Brown)という本を読みました。わずか数十ページの本でしたが、大変英語が難しく生徒も私も苦労致しました。6人の高3の生徒が、参加しましたが彼女たちは海外帰国生や、非常に優秀な生徒でしたがまずその内容理解が大変でした。大学の図書館で原書を手に入れ、コピーをして配布しまして生徒はお手上げで、日本語訳を入手して読みましても非常にホーソンは難しゅうございまして、英語と日本語を対照させながら何とか読みました。意見交換のテーマは迷信や日本のおばけについてなどでした。

ただ、このときはまとめにもいかないうちに、シアトルに大嵐が参りまして、レイクサイド校のコンピューターシステムが2週間ほど故障してしまい、そうしているうちにこちらの学年末に入ってしまいました。そのため最後のまとめまでは行きませんでした、外国とのリーディングプロジェクトの第1回目となりました。

その後、アピックネット (APIC NET) What's Japan Project, に参加しました。ハンドアウトに書いてありますが、アピックネットは外務省の外郭団体で、パソコン通信を使って教育的なさまざまなプロジェクトを提供している団体でございます。興味のおありの先生方は入会なさると、様々なプロジェクトを提供してくれると思います。

これは「What's Japan」という、「日本とは何か」、日本に対して外国の人がどんなことを知っているかということで、世界に出したアンケートに対する外国の人の答えを私が生徒たちに見

せまして生徒が英語で外国の人にそのアンケートの答えについて意見を交換するものでした。外国の生徒たちが日本についてあまり知らないことに生徒は非常に驚きまして、それで「日本人の高校生活を書く」というようなことで、生徒が書いたものを私が生徒の名前を入れて打ち込んで討議に参加し、プリントアウトした返事を教室に紹介しました。

これがちょうど終わった頃、大学で夏にインターネットの講習会がございまして、それまでインターネットというのは存じておりましたけれども、大学の研究者が研究目的で使うことのできるネットで、日本では高校の先生などはそれを利用できないと思っておりましたものですから、大学でインターネットの講習会があるというときに、とにかく使わせていただければいいなと思ひまして、参加致しました。学習院は「院」として契約してますので、高校でも中学でも先生も使っても大丈夫じゃないかと思ひますと親切におっしゃっていただけましたものですから、もうこれはコンピュサーブに高い請求書をもらう必要はないと思ひまして、それで早速センターからインターネットの私用のアドレスをいただきました。そしてコンピュサーブは解約して、英語科の机の上にあるマッキントッシュのクラシックⅡにモデムをつけ、電話で学習院計算機センターに入りましてインターネットを利用しておりました。

そのほかにもう一つ、「The Big Sibling Project」(お姉様プロジェクト)と勝手に名前をつけたのですが、アメリカのミネソタ州のミネアポリスにある、やはり私立の学校で小学校から中学1年生までの学校とメールを交換しました。その学校の相手が大変年が小さかったものですから、これがうまくいくだろうかと思ひましたが、小学校2年生が大きなお姉様に日本についていろいろ聞くというような交流を4、5、6月と3月いたしました。その時点で女子部の生徒はそれぞれ個人でアドレスをもっており、計算センターに参りまして交流相手の小学生に手紙を書き始めました。向こうからは「日本に住むってどんな感じ」というような非常にかわいらしい質問で、テレビは何が好きとか、ゲームはどんなことをしていると、生徒たちはかわいい質問に驚いたようです。でも、最初にこういう小さい人にお姉さんとしていろいろ教えてあげる文章を書く、やさしくわかるように書く、ということをしたことで、この後のリーディングプロジェクトで英語で意見を書いていく基礎になったような気がすると分析した生徒もおりました。

一番最近に行ったのは、このリーディングプロジェクトで、吉本ばななの「キッチン」という本でございまして。どうしてこの「キッチン」を選んだかと申しますと、最初のリーディングプロジェクトでは、カーリン・ブラッドホードの「The Nine Days Queen」、これはカナダの作家の作品で青少年向きのお話です。実際に9日間女王様を勤めた、エドワートⅣの直前に即位した英国女王のお話をカナダの作家が書いたものです。これをカナダの学校が選び生徒の数だけ送付してくれました。

次のプロジェクトはぜひ日本の作品を扱おうと言ってくれまして、それで、では何がいいかと

ということで、生徒といろいろと話しまして、夏目漱石がいい、宮沢賢治がいいとか、もっと最近の作品はどうだろうかと言っておりましたのです。でもカナダで簡単に手に入る本でないと大勢の生徒に読ませるには難しいということで、吉本ばななが大変外国で人気があって作品が訳されているということがわかりました。その中で人気のある「キッチン」を選びまして、早速私の方は日本の生徒用に買いましたのがこれでございます。生徒がこれを受け取った途端に「この表紙は何だ」というふうなことになりました。日本語の「キッチン」の方は表紙がチューリップですが、英語版になりますと芸者さんの写真が出てまいります。またこれにつきましては後でコンピューターを操作なさいますと、それについての生徒たちの不満、リーディングプロジェクトを始めるに当たって、この日本に対するステレオタイプに対する意見なども少しホームページの中に入れてありますのでご覧戴けると思います。

最初の方のリーディングプロジェクト相手校ウエストンスクールというのはケベック州のテレビ局から、インターネットの環境を実験校として無償で戴いたようで、この私共とのプロジェクトは学校を挙げての行事でした。ですので校長先生がメールをくださったり、プロジェクトの間に作家のカーリン・ブラッドフォードもインターネットのアドレスを戴いたようで、私たちの交流のメールが転送されたり意見を入れてくださったり学校挙げての活発な交流で大変楽しいものでした。

けれども翌年にはテレビ局に返却しましたので学校としてプロジェクトを継続する必要はなくなりました。インターネットは、学校の予算でそのまま残しているようですが、リーディングの先生が、最初は翌年も続けようと言っておりましたが、9月になりましたら突然、やはり授業に組むのはやめたいと言ってきました。大きな理由は生徒のメールをすべて担当の先生が一人で打ち込むので負担が大きいということでした。

そして急遽同じモントリオールにある新しい相手校の Trafalger School (トラファルガースクール) を紹介して戴きました。トラファルガーの方は授業レベルではありませんでした。私の方は授業としてやっており、トラファルガーはボランティアを募りましての交流ですのでメールの行き来がスムーズではありませんでした。トラファルガーはコンピューターについては非常に進んでいる学校と聞いておりましたので、ホームページで交流すればお互いのメールを待たないで、キッチンについての意見を交換できると思いホームページに取り掛かりました。

このホームページは最後の授業の3月初めにようやくでき上がりました。また後で先生方にごらんいただければと思います。

ではこの2つのプロジェクトについて詳しくお話ししたいと思います。

最初にカーリン・ブラッドフォードの作品を読むということで、カナダの学校がテキストを調達してくれました。カナダドルで3ドルくらいでしたので、300円にも満たない金額でした。し

しかしカナダの本はどこで聞いても日本では扱っておらず直接カナダの学校から送って戴きました。1週間で届きましたが、生徒たちが読む時間も必要でございましたので、始める前に少し何かお互いの文化を比べようということになりました。それで、カナダドルと円の購買力の比較を試してみました。

日本で生徒たちが興味のあるようなものが、一体幾らなのかということをも全部調べました。例えば興味深いのはCDの値段、そのほか生徒たちは映画館の入場料を問題にしておりました。映画に行くのに日本は非常に高いですが向こうでは8ドル、このときカナダドルは71円でしたので、本当に日本とは比べものにならないくらいの値段でした。例えば野球の観戦の切符は幾らぐらいかなど、いろいろと値段を比較して、女子部の生徒たちは日本の物価の高さを実感したようでした。これは先に日本からカナダに値段のリストを送りましたら、向こうから分かりやすい表にして送ってくれました。

そして、質問がありまして、こういうもののお小遣いをどうやって得るかということでした。向こうの人たちはベビーシッターをしたりアルバイトをして得ているわけですがけれども、日本ではどうやって得ているかということです。ベビーシッターやアルバイトはしない生徒が答えると、カナダの生徒はとても不思議に思ったようでした。

その後リーディングプロジェクトは毎週1章ずつ読みながら進んでいきました。これを致しまずには、とても私の女子部の机の上のマッキントッシュ1つでは不可能でして、このときに初めて、計算機センターで21人の生徒たちが全員アドレスを戴きました。アドレスをいただいて、そして生徒たちは女子部からセンターまで歩いてまいりまして、そして自分が1章読んだ後の感想と意見を自分で打ち込んで送る訳です。ではどのようにメールを管理するか、授業ですので評価もする必要があり、計算機センターの先生にご相談しました。そうしましたらメーリングリストを作ってください、メンバーが全部共有するような1つのアドレスをいただきました。ですから生徒がメールを送ってきますと、そのメールは私を含めた全員で共有する仕組みになることを教えてくださいました。

これはメールが日本とカナダをどのように往復するかということを図式にしたものです。メッセージをカナダから日本へ1つのアドレスに書いてきますと、クラス全員に送られます。女子部の生徒のメイルはクラスの仲間とカナダの先生に入っていきます。トラフィックはなるだけ少ない方がよいということで一本の線でカナダに行くわけです。そして向こうでカナダの生徒に配送される仕組みになっています。ただ、ウェストンスクールは生徒全員がアドレスを持っておりませんので、先生のところに行きまして、そして先生が取りまとめて生徒に配ってくださるといったようなやり方をしておりました。

それで、いよいよ本を読みまして、意見交換が始まることとなります。

生徒達は皆自分たちの英語は相手に理解してもらえるかということを心配しておりました所へカナダの先生から「あなた方の考えていることを皆でシェアしたいわけだから、どうぞ文法やスペルの誤りを心配しないでください」というようなメッセージをまず送ってくださいます、気分的に生徒は楽になったんだろうと思います。

そうして次にカナダの生徒達に与えたreading guideline を女子部の方にも送ってくださり、女子部の生徒は日本にいながらカナダの先生からreading の授業を受けている状況ができあがりました。

私の授業は木曜日にございます。カナダとの時差は大体14時間ぐらい。サマータイムではちょっと違いますが、日本の方が先に進んでいるものですから、時差を向こうが計算いたしまして、こちらにうまくメールが私たちの木曜日の午後の授業に届くようにということで考えてくださいました。

これが女子部の生徒が最初に送った2章に対する感想の例です。

このときは相手の学校の人数が10人のございまして、私どもは21人だったので2人でペアになりまして感想を送っておりました。

これはみんな一部なのですが、どんなことを書いているかがここでわかりいただけると思います。とにかく最初は長く書けないんですね。最初は家で準備をしてきて1章読んで、そして書いて送るといだけのことで、まずタイプを使うことにも時間がかかりますし、書いてきたけれどもこれでいいのかどうかというようなことで、非常に時間がかかりまして、あんまり長いものは最初は送ってありませんでした。それが回を重ねるごとにだんだん長くなるというのが私の驚きでございました。最初はこんなふうにして、ちょっとした感想みたいなことを入れておりましたんですが、今度はカナダからこんなふうに送ってきました。

そうすると、今度下に、わかりになるとと思いますが、これは「その子とさわ子」という生徒宛に送ってきているメールです。最後のところにパーソナルコミュニケーションが入り始めました。向こうがうまくペアを組んでくれましたものですから、パーソナルコミュニケーションがだんだん入ってきましたあなたの母親が主人公のジェーンのお母さんみたいだったらどうするかなどという質問からだんだん個人的な内容が入ってきました。そのうちに本に対するより、だんだん下の方が長くなりまして、自分の生活のこととかいろいろなことが入りまして、最後の方は本当にお互いの考え、日常生活、学校生活などについてもかなり入ってまいりました。向こうに送る文章もだんだん長くなってきましたし、生徒も最初はこの本を読むのはとても大変だと言っておりましたが、物語の筋を外れなければわからない単語があっても飛ばして読むことができるようになりました。そして始めは登場人物の名前が非常に込み入っているんですけども、それも人間関係がだんだんわかってくと乗り越えたようで、読書の早さも増したようで、英語で本を読

むということ面白いと思えるようになったようでございます。

これがウエストンスクールとのプロジェクトでございます。ウエストンスクールとのプロジェクトというのは、私が今までやった中で、まだそんなにたくさんはやっておりませんが、最も成果があったプロジェクトと思われま。これはウエストンスクールの図書館の先生が熱心にサポートをしてくださいます、メールが滞らないように、そして休んだ人がいますと、きちんと休んだ人に関してのメッセージを入れてくださいました。このメールのやりとりをしている間に、ちょうどKLMが65周年を記念して、世界を結ぶプロジェクトということで、何か世界を結ぶすてきなプロジェクトには飛行機代と滞在費を持ってお互いを会わせてあげようと、そういうコンテストがございまして、それにこの先生が私たちのプロジェクトを申し込んだりその結果を待つメールが何度も来て、結局は落選しましたが、わくわくすることがたくさんありました。ましたものですから生徒も教員同志も大変楽しみの多かったプロジェクトだと感じております。

以上がウエストンとの交流でその次にやりましたのが、トラファルガースクールとの「キッチン」を使っての交流でございます。本当はウエストンスクールと続けてやるつもりでございましたので、6月にテキストを購入いたしまして、夏休みの課題として生徒は読んでおりました。前回のプロジェクトではこちらは1章ずつ進むのがやっとでしたが、向こうはあっという間に1冊読んでしまいました。それで今回はこちらが先に読んで私が課題を6つ両方の生徒達に出しました。その第一は台所は自分にとってどういう意味を持つか。これはかなり文化比較にもなる質問でございまして、日本の台所、つまり日本の女性の位置とかそういうことも含めておもしろいトピックになりました。

あとは、このお話をお読みになった方はおわかりかとも思いますが、この主人公のみかげという人は、突然たった一人の家族が亡くなってしましまして、ひとりぼっちになってしまうんです。突然みかげのように全くひとりになった時自分ならどうするか。裕一の母親の心理分析も課題の1つでした。このお母さんというのが実はお母さんではなく、お父さんだったんですけども、母親が亡くなって、最愛の妻が亡くなって、そしてそのお父さんが突然女性に変わってしましまして、ですからえり子さんというのは本当はお父さんなんですけれどもお母さんですね。一体どうして裕一のお父さんがお母さんになってしまったのかということはここでも考えたいことだと思しまして、テーマとして適切かどうかわからなかったのですが、これを避けて通ることはできませんで、こんなことも生徒に考えさせました。あと、家族とは何か。一体どういうものが家族なのか、血のつながりのない家族というものすばらしい家族ではないか。

その他、「キッチン」の中にはお料理の話が非常に出てくるんです。主人公がお料理が好きで、です。生徒はどうやってお料理を覚え、どうやってお料理をしているかという食べ物のお話。

あとは、その話の中でカツドンなどが出てまいりまして、日本のお料理のカツドンのつくり方

などいろいろレシピを話すのもいいだろうということで、こんなテーマに毎回答え、生徒は毎週それぞれのテーマに沿って自分で書いてきたものをメールに打ち込むというような形でトラファルガーとは始めました。

これが生徒が書いた例でございます。ちょっと小さくて読みにくいかもしれませんが、いかがでしょうか。

女子部のある生徒が「キッチン」にはどういうイメージがあるかを書きました。そして日本の女性の地位みたいなものをこの人は考え始めまして、日本ではどうもお台所というのは北向きだと。そしてどうも女性というのはまるで召使みたいにして男性に仕えてきて、だから台所の位置が北向きの暗いところにあるんじゃないかなというような、何というんでしょうか、台所の位置から女性の位置にまで思いがいきまして、そしてこの文章を書いたわけです。

そうしますと、そこに返事が相手からすぐ来ませんで、ウエストンスクールの先生のメーリングリストの中に入れてあったものですから、先生が読んでくださりまして、非常におもしろいとコメントをしてくれました。

そうしましたら、なかなかそのトラファルガーからの返事が来ないものですから、今度は先生がとても長いメールをその生徒に書いてきました。そして、お台所と女性の地位みたいなことについて先生がご自分の意見を書き始めました。

そうしましたら、今度はこの生徒はお母さんと台所の持つ意味、そして女性の地位というようなことを家で話して、毎回この先生からのメールが来ますと、家に持って行って、そしてそれをお母さんと話す。そしてお母さんの文章を英語に訳して、そして先生のところに送ったりいたしまして、この生徒は自分の母親のお台所に対する考えや女性の地位に関することまでも何度か先生とは議論しました。そうしているうちにカナダの先生は、ではとにかく台所の写真を撮って、お互いに紹介するのもいいんじゃないかと提案して来ました。

それがヒントになり、ああこれはホームページを使ったら面白そうだと思います。先生は写真を送ってくださったりしまして、このころから余りトラファルガーとの交通が順調にあっておりませんでしたので、ホームページをつくらうと少しいろんな人に見てもらえ、うまくいくのではないかと思います。ですので相手からのメールが順調に来ないときは、大抵ウエストンスクールの先生が一生懸命メールを見てくださっては、生徒に対応して下さっていました。

そんなことをしながら、やはり何としてでもホームページをつくらうということになりました。ホームページをつくるにはさあどうしたらよいかということで、いつもインストラクターの松本先生が私の授業のときに来てくださるものですから、ホームページを作りたいけれども、どうしたらよいかと聞きまして、アイデアを戴きました。そしていよいよセミナーのホームページをつ

くろうということになりました。生徒たちは、自分たちがやったプロジェクトの課題を全部ここに入れるということになりました。

ホームページをつくり始めましたら、非常に興味を持った生徒がおりまして、みんな写真を入れることになりましたのですが、そのホームページをつくる前に、とにかくホームページはどういうものかというので、ホワイトハウスに入って行って、一生懸命そのホームページの中をのぞいてみたり、あと男子部がホームページを持っていますので、男子部のページはどうなっているか見せてもらう。大学のページとかいろいろなページを見まして、そしてホームページをどうやって作成するかが決まりました。

作り始めて、生徒の写真をまず入れていきましたら、ある生徒は非常にホームページに関心を持ちまして、自分のホームページ、もちろん全員が私のところからそれぞれの生徒のところアドレスを持っていますのでリンクしているのですが、積極的に自分でホームページを充実させていきました。

こんなふうにして、自分のリーディングプロジェクトだけでなく、スクールライフとか自分のアートギャラリーと称して、コンピューターで絵を書きまして、そしてそれをこの中に取り込んでいるんですけども、プロジェクトの課題だけではないその他趣味などを加えて、どんどん自分で広げていくようになりました。ですから、これも自分で表紙をつかまして、そして「キッチン」についての自分の考えというものをここに書いて、また後でごらんいただければわかると思いますが、この生徒は英語に関しましては非常にすぐれておりまして、教師が教えるところは何も無いような、マチュアな生徒で、「キッチン」に対する考え方もすばらしいと思います。後でそれぞれのページをごらんいただければと思います。

このようにそれぞれがホームページをつくっておりました。

ところが、ホームページというのは生徒の顔もあり、今ごらんになっておわかりだと思いますけれども、いろんなことが入っているものですから、私は生徒のプライバシーが外に出て、そして何か悪いお誘いがあったらいけないと思ひまして、インターネットをやる時にも生徒には、とにかく私の言ったことしかやってはいけない。大学生になったらいろいろなことができて、ニュースなどいろいろ見るところがあるけれども、私が授業でやる時は私から言われたことしかしてはだめで、私が保護者として見守っているような立場でおりましたものですから、このホームページをやたらな人には知らせない。つまりレイクサイドとか自分たちと関係のある男子部の生徒は構わないけれども、全くオープンにはできないものにしておりました。

そうしましたら、ある一人の生徒が、実は学習院にはジュニアオーケストラというのがありまして、ジュニアオーケストラでホームページをつくるからその生徒のページにリンクさせたいと言ってきたんです。でもリンクすると前後の人もいますので、これはどうなのかなと思って、す

ぐ町田先生に電話しまして、そういうことを言っているんですけど、大丈夫でしょうかと伺いましたら、「いや、それはリンクすると前後が危ないから、じゃ、その人のだけ、差し障りのないものだけとって、そちらに完全に持って行ってらよい、ということで、生徒には、「絶対にほかの人のところに入ってこれないようにしてちょうだいね」ということで、その生徒だけが「キッチン」のプロジェクトがオープンになりました。

私は毎朝大体6時ごろメールをチェックしては1日を始めます。なぜ6時かといいますと、お昼過ぎますとすぐ混んでしまって、なかなかメールを読むのに時間がかかるものですから、朝早いとトラフィックも混んでおらず簡単にアクセスできる訳です。それである朝この生徒からの私宛のメールを見つけました。今、生徒たちは自由に計算機センターに寄らせていただいていますので、自分で好きなように自分のホームページを充実することができますし、E-mailも送れます。

「次のようなメールが来てました。全然知らない人で、いろいろ質問が書いてあるけど、答えていいでしょうか」と聞いてきたのです。

それで私も驚きまして、その生徒ががそのメールを転送してきましたものですから、私も読みました。この人は、WWWをブラウジングしていたらば、吉本ばなの「キッチン」を読んだ人がいるかなと思って見ていたらあなたのページを見つけたと。そして私はクリントン大統領出身のリトルロックにあるアーカンソーの州立大の先生なんだけれども、日本の文学で今「テールオブ ゲンジ」「源氏物語」をやっている、その次に「キッチン」を読もうと。「その取り合わせが先生何だか変じゃないですか」というふうに言ってきました（笑）。

私も「とにかく返事を書くのは待ってちょうだい。私はこれをもう一回よく読んで、そして本当にそういう人だったら連絡をするから」と申しました。実はアドレスを見ましたらcomというアドレスだったんですね。大体大学の人はeduというがあるので、変だなと思ひまして、とにかく私が本当に怪しい人ではないということを調べるまでは何も書かないでほしいと言ひまして、そして今度このアーカンソーのホームページを調べましたら、確かにワールドリタラチャーでこういうコースを持っている先生がいるとわかりました。ワールドリタラチャーのコースにその名前の先生があるということがわかりました。

またその質問を私は何度も何度も読みました。17個質問がありまして、やはりきちっと読んでいるからこれだけ質問が出る訳です。ベネディクトの「菊と刀」を読んでいまして、そしてもう随分昔のことなんですけれども、結局そのころの時代と今とはどんなふうになっているか、女性が三步下がって歩いているとか、階級社会についてだとかいろんな質問が17個あります。読みましたら、非常にまじめなものというふうにとれまして、そしてこれは答えても大丈夫じゃないか。つまり

「このこと以外のことを言わなければ多分大丈夫だと思うわ」というふうに申しました。

そんなことをしているうちに、またオーストラリアからも「キッチン」について彼女にメールが来ました。それはオーストラリアの大学生だということがアドレスでもわかりましたものから、この2人には大丈夫じゃないかと思うと答えました。

そうしまして、この生徒は2人にメールを書き始めましたら、一度に17個も答えられませんので、2つぐらい答えたりしておりましたのですが、そのたびごとに非常にまた興味深い返事が来たようで、「もう今は家族じゅうがこの先生の手紙を待っていて、私がコンピューターセンターで取ってうちに持って帰ると、家族でこの先生の話をしている。」と言っておりました。

こういうことがありましたらその生徒が、「もう先生、隠しておかないで、オープンホームページにしたらもっとおもしろい。トラファルガーから返事がなかなか来ないから、もっとオープンにしたらおもしろいんじゃないか。とにかく残った日は少ないけれども、1月だったんですけどももうオープンホームページをつくりましょう」ということになりました。そうなりますと、高3の生徒は外部受験の生徒が半分ぐらいおりまして、人数が大変少なくなってしましまして、その少ない人数で仕事を分担いたしまして、じゃこれはもうオープンのだれでも見ていいホームページだからということで、それでグループに分けました。ちょっと小さくておわかりでしょうか、OverviewとMapとSchool EventsとClasses, Miscellaneous というように、この5つのグループに分けまして、そしてそれぞれが担当してホームページをつくり始めました。

こうなりますと、私は英語を教えられてもホームページの作成法やスキャナーでいろいろな絵を取って張りつけたりすることはできませんで、松本インストラクターが助けてくださいました。

これは学校のパンフレットからとってきたものですが、スクールヒストリーなど、あとでまたどうぞお読み戴きたいと思えます。

学習院には松尾校舎というのがありまして、松尾校舎の写真をこんなふうにして入れてみましたり、女子部のキャンパスの絵を描きまして、これに色をつけました。これをつくるには相当時間をかけていたように思います。

これはコンピューターのセンターでの授業の風景です。詳細まで間に合いませんで、写真だけが入っております。

そのほか、Miscellaneousをつくった生徒は「朝から1日」という自分たちの

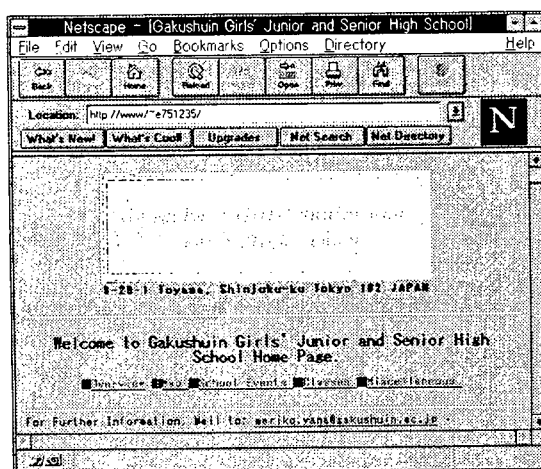


図 3

スケジュールで自分の好きな教科を入れました。

これも時間がなく充実はしていないのですが、生徒の1日の生活スケジュールが入っています、絵が好きな生徒は、ペイントブラシでこんな絵を書きまして、球技会のボールに見立ててこんな絵を入れたりしておりました。

そんなことをしてホームページができ上がりまして、後でごらんいただければと思いますが、リンクされましたので、オープンになっております。これからどういう反応が外から来るかということを楽しみにしております、その反応については生徒たちが卒業してしまいますので、大学に行って、新しくアドレスを得れば生徒に転送しますとっております。

インターネットを使って色々やっていますが、この授業がすべて順調にいくわけではございませんで、難しい点もたくさんございます。まず一番乗り越えなくてはいけないのは、学校のアメリカやカナダと学期の時期が違うことです。学期が違うためにスケジュールを合わせる事が難しいということで、つなぎに他の先生が間に入って助けてくださいましたが、乗り越えるということが非常に難しいと思います。

あとは、テクニカルサポート。これは私は計算機センターの先生方や松本さんからサポートを受けましたので、私はとても恵まれていたと思います。

もう1つは交流を授業ベースとするかボランティアの生徒たちとするかで中身が違ってきます。相手が授業でしたら充実すると思います。でもボランティアでの交流は、結局メールを書かなくてもいいわけです。つまり私が与えた課題を別に書いたから書かないかで、評価があるわけではありませんので、相手がボランティアであるときはプロジェクトはやりにくいんだということ

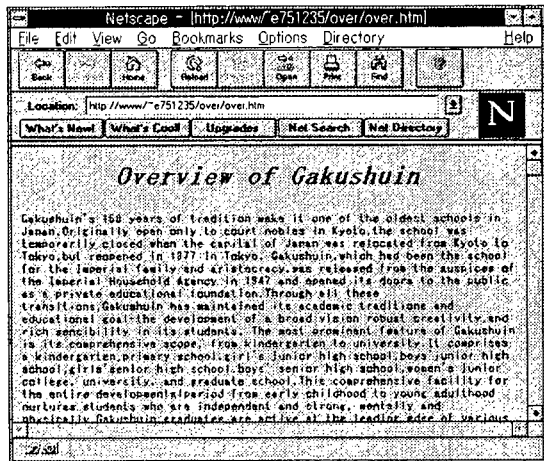


図 4

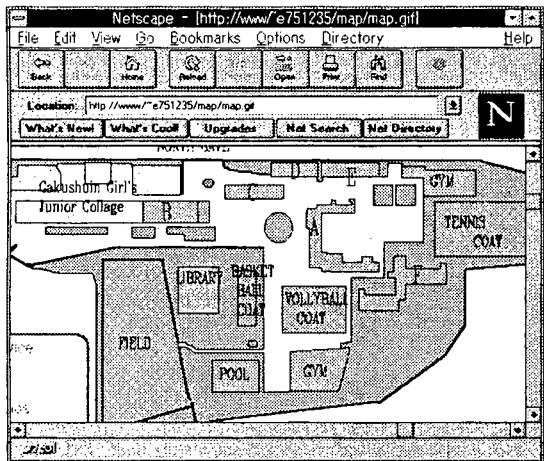


図 5

がわかりました。

あと、これは今後のことで、もうすぐそうなるとは思いますが、女子部からダイレクトにインターネットに入って、女子部で授業ができることが私の願いでございます。

そして、松本さんやこのセンターの先生のようななたか技術面でのサポートをしてくださる方がコンピューターの授業ではどうしても必要ではないかと思ひます。もちろんこちらの先生方はベテランでいらっしゃると思ひますが、私のような素人がやるときには、やはり助けてくださる方が必要だと思ひております。

3月号の「英語教育」の中で、早稲田大学の田辺先生が「これからの英語は、イングリッシュの平易なライティングが、インターネットの世界になっていくと重要度を増すのではないかと書いていらしてとても興味深く読みました。リーディングプロジェクトというのはライティングの授業でもあります。リーディングとライティング、そしてインターネットで使う英語は、平易な英語で十分なわけです。平易な言葉で自分の考えを伝え相手からのメッセージを理解できることが必要です。インターネットはライティングの世界であると思ひます。現在はオーラルコミュニケーションが注目されていますが、written communication が重要度を増すのではないかなと思ひております。

それから、昨日の朝日の夕刊にも「インターネットと民主主義の世界」という記事が出ておりました興味深く読みました。

私はこの2年間、カナダの先生とメールを殆ど毎日よう交換していますが、一度も会ったことはありません。でもその人のことを私は大変よく知っていますし、それから私のこともいろいろ書いていますのであちらもよく知っています。何かとても不思議な世界での親密なお付き合いです。授業の範囲では教員はここで生徒の相手をしっかりとメールリストなどでチェックしてはおりますけれども、これから個人の世の中が進みますと色々難しいこともあるのではと感じております。

本当にとりともめもないお話で分かりにくい事もございましたと存じます。ぜひアクセスしていただいて、ごらんいただければと思ひます。これは公開していない方のホームページのアドレスでございます。公開している方は学習院のホームページをあけていただければすぐご覧になれます。未公開の方は生徒の写真が載っておりまして、着物を着た写真や、自分の身長まで書いたりしておりましたり、その他の個人情報に掲載されております。コンピューターグラフィックで絵を描いたりしている生徒もおります。もしよろしければごらんいただきたいと思ひます。

まとまらない話しでしたが長時間ありがとうございました。また何か質問がございましたらお受けしたいと思ひます。

(質問)

【司会】 どうもありがとうございました。

何か質問ございましたらご遠慮なくお願いします。

それからホームページなんですけど、見たいけれども見方がわからない方は手を挙げていただければ……(機械の使い方について説明する)……。

【司会】 最後の方で、大丈夫な質問はあったというんですが、危ない質問というか、大丈夫でないメールというのがございましたか。

【八名講師】 生徒はオープンにしていますので、まだ今まで危ないメールをもらったことはありません。

【A氏】 評価はどうするんでしょうか。

【八名講師】 評価は、電子メールだけの授業の時には、私のアドレスに生徒の書いたものが全部来ますので、英語の内容で評価していました。ただ、ホームページになりますと、英語プラスのものが入ってきますので、大変難しくても生徒には、絵を上手に書いたからいい点をあげるというのではなくて、プロジェクトに対する課題、つまりそこに書いた英語の文章で評価するといっておりますけれど、やはり非常に美しくやった人にはプラスがついてしまったかと思いません。

【A氏】 じゃ、テストというものはないんですか。

【八名講師】 テストは、実は学期に1回はテストをしなければいけないということになっておりますので、テストの時間にはリーディングプロジェクトをやったことによって、英語の速読の力がどのように増したか、自分の英語の能力がどういう形で伸びたか分析して英語で書きなさいと言ったようなことを英語で書かせました。ですから1学期に1回ある試験は、英語での自己分析みたいなことを致しました。そして最後の今回の試験では、このホームページをもう少し後輩に充実させてほしいので、ホームページをいかに改良していったらよいかを英語で書きなさいということを含みました。

【A氏】 それは投げ込み的なテストになるんでしょうか。

【八名講師】 いえ、投げ込みではありません。学期ごとに、一応ここまでやったから、このプロジェクトについての評価、反省、そして今後の展開というようなことで、投げ込み的ではなくて、大体学期末のところで書かせる課題を前以て言っておいて、その時間に書かせるというような試験をしております。

【B氏】 同じような質問なんですけれども、例えば、先ほど文法とか考えなくてもいいと。それはそうだと思うんですけれども、多く書けば多く間違えるだろうし、中にはスペリングとか文法とかめっちゃくちゃ書いちゃう子はいないかとか、そういうのはどういうふうに評価したり、あ

るいは方向づけていったりして、評価が一番興味があるんですけど、どういうふうになさったのか。

【八名講師】 最初私が打ち込んでいたときは、生徒の文を読んで、そして間違いを直して打ち込んでおりましたのですけれども、それをしますと非常に負担が多くなります。つまりカナダの最初の相手校がもうやめようと言ってきたのは、先生の負担が多すぎるという理由だったのです。私も最初書き直しをしていました。でも生徒にたくさん書かせることによって、やはり彼女たちの能力が増す。たくさん書かせたら私は見切れない。ではどうするか考えついたことはメールを送信する前に隣の人と読み合うと言うことです。というのは、その程度でおかしな間違いは避けられると言うことです。最初にメールを出すというときのメールは「MAIL」だから、間違ってもう一つの方を書いてはいけないと言っても、生徒はメール「MALE」の男の人の方のを書いてしまいました。「そういう間違いだけはしてほしくないと言ったはずなのに」というふうに言ったんですが、そういう誤りをする人もおります。

ですから、かなり恥ずかしい思いを私などはいたしておりますけど、評価するのはそれを超える、自分の考えをを何とか相手に伝えたいという努力、英語はつたなくても、相手はそれを読み取って、相手の意図をくみ取って、自然な表現で聞いてきてくる訳です。そうすると生徒は、「あっ、そうか、私の言いたいことはこういうふうに書けばよかった」ということが分かるのです。

ですからメールはかなり相手からの文章を借りることができます。私なども相手から来たメールを見て、ああ、こういう表現をここで使ったらいいんだなと、それを覚えて使ったりしておりますのでよい見本になる訳です。そういう意味で、生徒は間違えますけれども、私の教えている生徒は高3で相当力もついておりますので、意味のない文章を書くことはまずありません。英語演習を選択している生徒はそれなりの力のある生徒だと思います。

【B氏】 希望者なわけですか、選択の授業は。

【八名講師】 そうです。英語演習は来年からカリキュラムが変わりますので、なくなります。本年が最後の英語演習だと思います。選択前の説明でインターネットをすると言っておりません。たまたま英語演習を私が担当することになって、こう言った授業内容になった訳です。

【B氏】 でも大体英語が得意な生徒が集まって。

【八名講師】 もっと英語をやりたいなと思っている生徒がほとんどでございます。

【B氏】 どうもありがとうございました。

【C氏】 先ほどのメールを読ましていただくと、大学生でもなかなかうまく書けないと思うんですけど、やっぱりそこまで教育するのが英語の教育だと思うんですけど、こういう機会を与えて学習意欲を増すというのは1つのメリットだと思いますけれども、ただ、それだけでは

自然にはこうならないですね。

【八名講師】 そうですね。

【C氏】 その辺はどのように努力なされたんですか。

【八名講師】 私はたまたま高3でこのプロジェクトができたのも、結局生徒たちが中1から高2まで一生懸命いろいろな形で英語で習得して、そしてここで初めて自分の学んだ知識を総結集して、自分の考えを書いたり、読んだ本に関する意見を書くと言ったような能動的な活動をした訳です。最初の小学生への手紙はほんの短い手紙に生徒は1時間かかったようです。

でも、それまで確かにいろいろと英語を訳したり、書いたりいろいろしてきたけれども、実際の相手はいなかった。でも、初めて相手を得て、生徒たちは本当に英語が使える道具だということがわかったと言っていました。もちろん細かい基礎的ないろいろなことの積み重ねがあってこれができたとは思いますが、だからといって高3でなければできないとは思いません。やはり中等科には中等科のレベルでできることもあると思いますし、基礎的なことを教えながらも、なおかつインターネットを利用して刺激を与えるということは、自分から学ぶという動機付けにはなると思います。

【C氏】 意欲の面は確かにそうだと思うんです。私がお聞きしたいのは、帰国子女の生徒がいるということ、かなり特殊な生徒だったんじゃないかと思うんですけどね。

【八名講師】 そういう人もおりますけれども、ごく普通の生徒もたくさんおります。今までこの英語演習のクラスを何年か持っていましたけれども、別にこの人たちが特別に優秀というわけでもなかったように思います。

【C氏】 大学生はなかなかそういう人に巡り合えない。非常に不幸ですけどね。

【D氏】 ご指導を聞かせていただいて、興味深く存じました。最初に変な初歩的な質問で恐縮なんです、キーボードの操作はどういうときに、どうやって教えたんでしょうか。

【八名講師】 最初の時間のときに、とにかくコンピューターのスイッチの入れ方から、そしてインターネットはどうやって使うかというようなことを30分ぐらいいたしました。

そして最近の生徒はワープロを持っているような生徒もおりまして、すぐ覚えました。大体両手を使ってこんなふうにタイプを打つのだということを教えれば、すぐそれができなくても、人差し指を使ったりいろいろしながらやっていたようで、苦労はなかったようでした。ただ、早く打てませんから、キーを探すのに時間がかかっていました。

文章を打つのに時間はかかるのですが、それ以外のコンピューターの使い方などは生徒達は覚えるのが早くて、驚きました。

【D氏】 ありがとうございます。もう一つですけども、先ほど、毎朝お起きになると、5時とか5時半に。

【八名講師】 コンピューターのスイッチを入れるわけです。

【D氏】 そうするとご自宅にそういう装置がないとできないということですか。

【八名講師】 いや、そんなことはないと思います。学校で朝早くメールを開けば、よいのですが、朝は教員室は欠席の電話が入ったりいろいろ忙しく、コンピューターを使って自分のメールをチェックするゆとりはないので家で致します。でもそれは空き時間などにやればよいのですけれど、空き時間が午後になりますと、午後はトラフィックが非常に混んでいましてアクセスに時間がかかるわけです。ですので朝一番にすることになる訳です。

夜中もかなり混んでいます。10時から12時というのはパソコン通信に使われる電話利用のピークの時間だそうです。朝6時ごろは短時間にアクセスでき、あっという間にメールを送ることもできます。

【E氏】 東海大相模高等学校の英語を担当しております大島です。本当にきょうは興味深いことをありがとうございます。

実を言いますと、私、去年の夏にマッキントッシュLC630を買って、この世界に興味を持ったんですけれども、ことしの私のテーマとして、自分の学校のバーチャルホームページをつくりたいというふうに自分で考えているんですけれども、全くもう本当に素人からホームページをそういう形につくるのに相当時間がかかるものでしょうか。変な質問ですけれども。

【八名講師】 私、本当に全く素人なんです。それを今後ろにいる松本さんというインストラクターの方が、ホームページはどういう言語で書くか、HTMLの初歩のプリントをつくってくださいました。ですからどうやってつくるか、一体ホームページは何かというところから始めて、そしてそのHTMLの言語でどういうふうにして書いていくかということをお教えたかったです。

ですから、何かそういう機会があれば、ちょっと講習をお受けになるとか、あるいは本をお読みになって、プラスどなたかにお聞きになるとよろしいと思います。それにこのごろHTMLの言語で書かなくても、ホームページが書けるソフトがあるそうで、ですからどんどん進んでいって簡単にできるようになると思います。その辺のところは、例えば東海大学でいらっしゃいますか。

【E氏】 はい。

【八名講師】 そうしますと、東海大の朝尾先生などに伺ったらいかがかと思います。

【E氏】 付属高校で、ちょっとつながりがないです。

【八名講師】 そうでいらっしゃいますか。でもお聞きになることは一向に構わないだろうと思います。ホームページ作りは生徒さんも喜んで参画されるのではないかと思います。先生はお若くていらっしゃるからきつとすぐにお覚えになると思います。私などなかなか覚えられないので

すが。

【E氏】 どうもありがとうございました。

【F氏】 いわゆるインターネットを使わない普通の授業と大分やり方が違うと思うんですね。我々が今普通にやっている授業だと、教室でその場で始めるという感じの授業だと思うんですけど、話を聞いていますと、事前に相当生徒が作業をしてくれないと授業にならないというふうなイメージがあるんですけども、そのとおりでしょうか。で、もうちょっと具体的にどんな作業を生徒にさせるのかというのが、わかりましたら。

【八名講師】 とにかく読むということが第一の課題です。例えば、最初の本でしたら1章ずつ読んでいく。1章ずつ読んで、その章に出てきた事件に対して自分はどう思うかとか、それからガイドラインにあったんですけども、もし自分がそういう立場だったらどういうふうに対処したらいいだろうとか、そういう母親と娘の関係というのは今の世の中では考えられないとか、何か感じたことをノートに書いてくる。ノートに書いたものと教科書を持って授業に来て、そしてすぐインターネットを開いて、まとめて打ち込んでいくのが授業です。

でも生徒は書いているうちにまた考えたり、言葉が分からなくなったりするので私は辞書がわりです。回っていくと「先生、これって英語で何というの」というような感じです。「私を辞書に使わないでください」と言っています。読む課題はかなり大変で生徒たちは電車の中で本を読んだり、時間さえあれば読んで、かなりきつかったようですが、でも木曜日に出せなかったら相手から返事が来ないので、楽しみがあったので、あんまり苦痛ではなかったと言っていました。ある生徒が電車の中でその本を読んでいたら、隣に座った外人が「何読んでいるの」と質問してきたそうです。でもこの本で何をやっているのか、インターネットのことをうまく説明できなかったからくやしかったと言っていました。でもこの本を使ってカナダの人と何かやっているということは少しは英語で言えたといった経験を話してくれた生徒もおりました。課題は多かったのですが、でもほかの授業をしていて授業で課題をたくさんだと皆文句を言いますが、この授業で文句を言われたことはなかったのです、それなりに生徒は楽しんで消化してくれたのではないかと思います。